私と師匠の龍を巡る旅

雨と傘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私と師匠の龍を巡る旅

【Ｎコード】
Ｎ８９６０Ｔ

【作者名】
雨と傘

【あらすじ】
私の名前はフィア・ハルベルク。魔術師見習い。大剣使いの師匠と旅をしている。ある日、冒険ギルド『旅鳥の止まり木』で私たちは妙な依頼を見つけた。それが私と師匠の龍を巡る旅の始まりだった。剣士な師匠と魔術師な弟子の旅の話。

プロローグ（前書き）

ファンタジーを書くのは初めてなので、気になる所や矛盾点、誤字脱字があったら報告していただけると嬉しいです。

プロローグ

雨が止んだ。
空をどんよりと覆っていた雲の間から光が線となって零れ落ちてくる。
落ちてくる光は草原の水滴に反射して輝き、幻想的だ。
流れる空気は澄んでいて少し冷たい。

風に揺れる草原で、鮮やかな赤の細長い実を一匹の竜が食している。
あの暗めの黄緑色に特徴的な長い首、全体的に丸みを帯びた体をした竜は”緑葉竜（リーフ・ドラゴン）”だ。
キョロリとした丸い目がかわいらしい。
”緑葉竜（リーフ・ドラゴン）”は森林や草原地帯に広い範囲で生息していて、樹木の葉や果実を主食としている。
小型〜中型に分類される竜だ。
群れていないところをみると成体のオスなのだろう。

しかし、あの赤い実の木は”ルム”といい、気候の関係かこの地域にか生えていない。
ルムの実は赤い皮を剥（む）くと出てくる果実は白く柔らかで、味は甘く美味。
果実酒にも使用されている、この地域の特産品だ。
しかしこの果実に含まれている種は小さいが毒がある。
種を食べたしまうと体に力が入らなくなりやがては死に至る、神経麻痺系の猛毒だ。
なので市場では種を抜いて干し、干しルムとして売られているこ

とがほとんどだ。
干しルムは生のルムの実よりも甘みに深みがあり、焼き菓子などにも使われる。
干されているので保存がきくから人気がある。

ちなみに、あまり一般には知られていないが、ルムの木は種ごと食べた動物が死ぬと、しばらくして死体を栄養に種が発芽して成長する。
別名”寄生果(きせいか)”。
…私はこれを知ってからルムの実が食べられなくなった。
知らぬが仏、という事だろう。

しかしあの”緑葉竜(リーフ・ドラゴン)”はルムの実を種ごと食べているのに倒れる気配がない。
ふむ、と考え込む。
…もしかしたら、この地域の”緑葉竜(リーフ・ドラゴン)”はルムの種の毒に耐性があるのかもしれない。
推測を手帳に書き込む。

ルムの実を黙々と食べ続ける”緑葉竜(リーフ・ドラゴン)”を少し離れた木の上から少女が観察していた。
少女は短い薄茶色の髪に琥珀色の目をしており、少しダボッとしたコートを着ている。
コートは濃い深緑色で、フードが付いていた。
腰には短剣を差しており、少年のようにも見える容姿をしている。
手に持った手帳は角が擦り切れていて、使い込まれていることがよく分かる。

その木の下には赤みの強い赤茶色の髪と目をした男がいた。

男は地図を手に空を見上げ、雨が止んだか確認している。
空を見上げているだけだが、身のこなしに隙は無く、均等のとれた体つきをしている。
背中に背負った大剣はよく見ると細かい傷があるが、よく手入れされていて鈍く光っている。。
男は雨は止んだと判断し、木の上の少女を見た。
少女はまだ”緑葉竜（リーフ・ドラゴン）”を観察している。
「フィー。」
男が地図を片づけながらそう声をかけるとフィーと呼ばれた少女はむっとしながら男に顔を向けた。
「なんですか、師匠。」
「行くぞ。」
「もう少し観察したいんですけど。」
「だめだ。予想外の雨で時間を潰したから、すぐに出発しないと野宿になるぞ。」
「…わかりました。」
野宿はいやです。と少女は呟き、トンッと座っていた枝から飛び降りた。
高さがあったが、少女は風を起こし着地の衝撃を少なくして、地面にふわりと着地する。
木の根元に置いておいたリュックに手帳を仕舞うと、そのまま背負った。
男はそれを確認すると歩き出し、少女もそれについていく。
二人は広い草原を目的地に向かって進み始めた。

プロローグ（後書き）

とりあえず、完結できるように頑張ります。

奇妙な依頼（前書き）

話に矛盾が出来たので、依頼を受けた理由を修正しました。

奇妙な依頼

事の始まりは『旅鳥』の掲示板に貼ってあった妙な依頼からだった。

王都の天気は晴れ。
空を見上げれば真っ青な青空が広がっている。
しばらくは、天気のいい日が続くだろう。
目の前の石造りの立派な建物には、人が多く出入りしている。

ここは『旅鳥の止まり木』、通称・旅鳥や依頼斡旋所、冒険者連盟などと呼ばれている。
ここでは、金さえ払えばどんな事でも依頼する事が出来る。
依頼は、名前を登録すれば受けることができるが、
どの依頼を受けるかは個人の責任で、どんなことに巻き込まれても死んでも文句は言えない。
大体は、薬草などの採取や魔獣などの討伐、護衛とかだけど。
登録する際には、腕試しというか試験があるらしい。

ここにはさまざまな人々が依頼を受けにやって来ている。
私と師匠は、ギルドの依頼を受けにやってきていた。
「おい、突っ立ってんな。さっさと行くぞ。」
「はーい。」
ぼーっとしすぎたようだ。

中の様子は相変わらずで、受付では人が忙しく動き回っているのが見える。

さらに奥に行くと壁に巨大な依頼掲示板が掛けられていて、多くの依頼が貼り出されている。
掲示板の額縁には模様が彫られていて、控え目な模様だが美しい。
「ここは相変わらずですね、師匠。」
「ああ、そうだな。
とりあえず、いいのがないか探すか。」
「じゃあ、私は右から見てきます。」

師匠から離れ右端から依頼を見ていく。
やっぱり護衛依頼が一番多いけど、護衛依頼はめんどいから却下。
それに、誰かを守りながら戦えるほど私は器用じゃない。
薬草の採取もランクが低いし、報酬も低いから却下。
なかなかいいのが見つからない。
討伐とかがベストなんだけどな。

…これなんかいいんじゃないか？
魔獣の討伐で、ランクはA。
依頼地もそんなに遠くないし、報酬もいい。
うん、それなりの好条件。
とりあえず、師匠に知らせに行く。

「師匠、いいのがありましたよ。」
「……。」
ん…？
「…師匠？」
返事がない。
ただの屍のようだ…じゃなくて、
「師匠、どうかしたんですか？」
「あー、ちょっとな。
…フィー、これ読んでみろ。」

師匠が指差した依頼書を見てみると、

”依頼者　「ターソル村、村長」
依頼内容「最近、ターソル村周辺で頻繁に起こる謎の揺れの調査」
Aランク・”
と書かれていた。

調査依頼か、珍しいな。
普通ギルドに依頼するのは採取や討伐、護衛の3つなのに。
「…この依頼がどうかしたんですか、師匠？」
「ただの調査依頼なら、”探究者”にでも報告すればいい。
そうすれば調査チームが組まれて、派遣されるはずだ。
あそこはディーみたいな研究バカの集まりだからな。」
「それなら、”探究者”からの依頼なのでは…ないですね。」
「そうだ、調査地が危険ならチームの編成に”探究者”からギルドに護衛依頼があってもいいが、
これは”探究者”が依頼者ではない。
それに、調査ということは原因を調べたいという事だろう？
なら専門的な知識がいるはずだ。
たしかにここはどんな依頼でも依頼できるが、ほとんどが戦闘に特化した筋肉バカだ。
だから、ちょっと妙だと思ってな。」
なるほど、たしかに妙な依頼だ。
「ターソル村ですか…。
たしか、あの村は”原始の森”に一番近い村でしたよね？」
「…そうだな。
そうか、”原始の森”か…。」

そう言うと、師匠はまた考えだした。
眉間にしわが寄っている。
う～む、師匠は何をそんなに悩んでいるのだろうか？
怪しい依頼はスルーするに限るのに。
「…よし、この依頼受けるぞ。」
「えっこの依頼、受けるんですか、師匠！？」
こんなに怪しいのに！？
「ああ、そうだ。
”原始の森”は謎が多い。
それに、”探究者”に依頼しない理由も気になるしな。
なにより、面白そうだしな。」
こうなったら、どんなに反対しても師匠はこの依頼を受けるだろう。
面白そうだからって変な依頼を受けないでほしい。
「…分かりました。
この依頼受けましょう。」
「よし、決まりだな。」

師匠はニッと笑うと、受付に向かって歩いて行った。

奇妙な依頼（後書き）

道中（前書き）

短いです。

道中

依頼を受けた私たちは、途中の町で一泊し、今は草原の中、ターソル村に続く道を進んでいた。
途中通り雨があったが、おかげで緑草竜（リーフ・ドラゴン）を観察できたからよしとする。

ターソル村はヴィスガナード王国の最東端にある”原始の森”に隣接する村だ。
”原始の森”は深い森で、”探究者”でも専門的に調べている研究者がいるほど謎に包まれている。
師匠はこの依頼を受けるときに”原始の森”を気にしていた。
なにかあるのだろうか？

つらつらと考えていると、黙々と歩いていた師匠が急に立ち止まった。
「フィー、ターソル村だ。」
見てみると、草原の向こうに村が見えた。
その奥には、巨大な森が見える。
おそらく”原始の森”だろう。
この距離なら日が落ちる前に到着できる。
でも…

「…師匠。地面、揺れていませんよね？」
依頼の内容は「謎の揺れの調査」だ。
なのに全く揺れを感じない。
「そうだな。とりあえず、日が落ちる前に村まで行くぞ。」
そういうと、再び歩き出した。

慌てて追いかける。

村はもうすぐそこだ。

道中（後書き）

サブタイトルがなんとなく納得できないので、もしかしたら変えるかもしれません。

ターソル村

ターソル村は、質素だが穏やかな村だった。
村の周りは柵で囲まれていて、村の門前では2人の男が見張りをしている。

主に木材が使われた家は質素な造りだが温かみがある。
明るい声に目をやると、子供たちが元気に駆け回っている。
煙突からは煙が立ち昇り、おいしそうな匂いが漂ってきた。

いい匂いだな～と思っていると、くぅ～とおなかが鳴った。
「…行くぞ。」
「…はーい。」
スルーが1番恥ずかしいです、師匠。

私たちが門に近づくと、門番がギロッと睨んできた。
ちょっと怖い。
だけど師匠のほうが目つきが鋭いから、あまり気にならない。
それに先生に怒られるほうが何十倍も怖い。
…思い出したら、軽く寒気がしてきた。

睨んできた男は筋肉隆々ではないが、鍛えられた体をしている。
そして深緑色の髪と、尖った耳をしていた。
耳が尖っているのはエルフ族の特徴。
そして、緑系の髪色は”森の民”の特徴だ。

駆け回っている子供たちも緑系の髪色をしていて、耳が尖っている。
そうか、ここはエルフの村なのか。

「俺たちは”旅鳥”の依頼を受けてきた。
依頼人はこの村の村長殿なのだが。」
軽く改まった口調で師匠は淡々と用件を話す。

2人の門番は軽く目を合わせ、睨んできた男が近づいてきた。
「…依頼書を見せろ。」
どうやら話は通っているらしい。
たまに話が通っていなくて揉める事があるから、軽くほっとする。
私はリュックから依頼書を取り出し、男に手渡した。

依頼書は”旅鳥”で依頼を受けると発行される、証明書のようなもの。
”旅鳥”の紋章が押されているから信頼できるものだ。
それに依頼書には”真実の書”といわれる、紙が使われている。
”真実の書”は契約書などにも使われている、魔術が組み込まれている特殊な紙だ。
珍しいものではないけど、魔術が組み込まれている物の独特で不思議な光沢がある。
師匠が言うには、契約違反があると何かが起きる…らしい。
契約違反なんてしたことないから、詳しい事はよく知らない。

門番は軽く依頼書を確認し、すぐに依頼書は返される。
護衛依頼とかじゃないし、偽物の可能性は低いよね。
「話は聞いている、俺はガイナだ。
長老の所に案内するように言われている。」

…あれ？
何故に長老殿？
師匠も軽く眉をひそめる。
「…依頼者は村長殿なのだが。」
ですよね、師匠。
普通、こういうときは依頼者の所に案内される。
村長殿と長老殿は同一人物…な訳はないか。
浮かんだ考えをすぐに打ち消す。
それなら言い方を変える必要はない。
「そうだが、長老の所に案内しろと言われている。
とりあえず案内するからついてきてくれ。」
そう言うとガイアさんは見張りをもうひとりに任せて歩き始めた。

…この依頼はやっぱり妙だ。
何も起こらなければいいけど。

ターソル村（後書き）

森の民やエルフなどについては、今後の話で詳しく書くつもりです。

先生もそのうち出てきます。

長老の家

ガイアさんに案内され長老の家にやってきた。
家というよりは屋敷と言った方がしっくりくる。
長老の屋敷は村の一番奥、村の中で”原始の森”に一番近い所にあった。
”原始の森”は深く暗く、どこか薄ら寒く感じた。

「俺の案内はここまでだ。
おい、リィ！客が来たぞ！」

ガイアさんは声を上げると、そのまま来た道を帰って行った。
見張りに戻るのかな？
とてとてと足音が近づいてきた。
足音は玄関で止まり、ドアが開いた。

「いらっしゃいませ！」

中から出てきたのは、くすんだ薄黄緑色の髪をひとつに纏めた女性だった。
くるりとした目が活発そうな印象をあたえる。
歳は…２０代前半？

「はじめまして、私はリーンといいます！
オババさま…じゃなかった。長老様にお世話をするように言われています。
どうぞ中へ！」

促されて中へ入った。

リーンさんに案内され屋敷の中を進む。
屋敷の壁にはところどころに文字が彫られている。
おそらく”呪文字”だろう。
好奇心が刺激されてなんとなく解読してみる。
文字は古くて所々解読できなくて詳しくはわからない。
でも書かれている文字はほぼすべて同じ。
害を与えるものではないようだ。
パターン的に前に先生に教えてもらった探索系の呪文字に似ている。
…うーむ、この家で起きたことはこの家の所有者にすべて情報が行くのかな？
ここは長老の家らしいし、所有者は長老と考えていいだろう。

考えながら歩いていると、なにかに衝突した。

「ぶふっ！？」

何事！？と顔を上げると師匠が呆れた顔でこっちを見ていた。

「ぼーっとしているからだ、ボケ。」
「…ぼーっとなんかしてません。」

まけじと言い返すが、鼻で笑われ一蹴された。
びみょーにムカつきます、師匠。

「大丈夫ですか？」

リーンさんが心配そうにしている。
あー、大丈夫です。というとほっとした顔になった。
なんか表情がころころと変わる人だな。
癒される。

師匠が急に止まったのは、リーンさんが目的の場所についたからのようだ。
目の前には豪華ではないが深みのある扉が鎮座している。

「ここで長老様がお待ちです。」

さっきの呪いの解読が正しければ、私たちがここにいるのは分かっているのだろう。
失礼します。とリーンさんが扉を開ける。

広い部屋の中には長いテーブルが置いてあった。
ここは客間なのかなー。
テーブルの一番奥にはひとりの老人が座っている。

あの人が長老？

長老（前書き）

短いです。

長老

長老はゆったりとイスに座っていた。
耳は尖っていて、若草色の瞳をしている。
髪は白くなっていて、若かりし頃は緑系の髪色だったのだろう。
この人もエルフの”森の民”だ。
さっきリリィさんが「オババさま」って言っていたから、女の人なのだろう。
目尻には皺が刻まれていて、鼻にちょこんと丸メガネをしている。
腰は曲がっていて、杖をついている。
杖にはツタを模した模様が彫られており、深い色合いから古いものだとわかる。
緑色の石がはめられていて、そこから魔石独特の威圧感がする。
古いもののようだし、魔石は貴重なものだ。
もしかしたら、代々受け継がれてきたものなのかもしれない。

「ようこそ、ターソル村へ。」
長老さんは柔らかく微笑みながらそう言った。
…なんていうか、底が見えない人だ。
微笑みながらも、こっちを観察している感じがする。
師匠について回っていろんな所に行ったから、人を見る目はそれなりに培われていると思っている。
不躾で嫌な目線ではないけど、柔らかくも威厳があるというかなんというか。

そのまま勧められ、イスに座る。
リリィさんは長老さんの後ろに控えている。

「さてと。」
ふぅ、長老さんが一息吐く。
それを聞くと、自然と背筋が伸びた。

質問と解答

「我らが村の依頼を受けてくれて、ありがとう。感謝するよ。」
長老がゆったりとした口調で話す。
しわがれた声だけど、穏やかで深みがあるように感じる。
厳しい顔をして黙っていた師匠が口を開いた。

「いくつか質問がある。
依頼はこの村の村長名義だった。
依頼に間違いが無いか村長殿に確認したいのだが、村長殿はどこにいる？」

「この依頼はワシが村長を通して依頼したものでな。
正式な依頼人はワシじゃ。
それに、依頼書には間違いはないよ。依頼内容はこれであっている。」

「ならば、お尋ねしたい。
依頼内容は”原因不明の揺れの調査”のはず。
道中でも村に入ってからも全く揺れを感じないのだが、私の感覚が鈍いだけですか？
村でも、不安そうにしている人は見受けられませんでした。
子供も普通に遊んでいましたし、本当に揺れがあるのですか？
…それに調査依頼は『旅鳥の止まり木』に依頼するより『探究者の集い』に依頼した方がいいかと。
”原始の森”を専門に調べている研究者もいるから、拒否される

ことは無いと思いますが。」

マシンガントークですね、師匠。
いつも口数が少ないから、不思議な感じ。
しかも一人称”私”だし。
いつもなら”俺”っていっているから、村長に敬意でもはらってるのかな？

長老はふむ、とうなづく。
「我らエルフは精霊の導きの元で暮らしておる。
…精霊の事は知っておるかな？」

師匠が嫌そうな顔をして私に目配せをした。
師匠、魔術関係の話は苦手だからな。
だから、魔術に関することは私の役割だ。

「はい、知っています。
精霊は”世界を満たす力”が意思を持った存在。
人には見えぬ魔力の塊のような存在、と聞いたことがあります。」

そう言うと長老は微笑んだ。

「お嬢さんは魔術師だね？それに、よく勉強しているようだ。」

驚いた。
魔術師を毛嫌いする人もいるから、魔力が外に漏れ出さないようにしているのに。
いや、まだ見習いなんだけどね。
精霊の事も「知っている」や「勉強した」と言わないで「聞いたことがある」と言ったのに。

エルフは魔力に敏感だと知っていたけど、ここまでとは。

「精霊はお伽噺の中の存在と思われていることが多いが、存在するよ。

”森の民”は名の通り、森つまりは植物の精霊に導かれ、それと同時に精霊を守っている。

”原始の森”は古から在り、精霊が好む場所でな。

だから、我ら”森の民”は”原始の森”を守護しておる。

『探究者の集い』に依頼しなかったのは、昔来た研究者に森を荒らされてな。

あまり好かんのですよ。

それに、依頼したのは原因を解明したいのではありませんから。」

「は？ならば何故、依頼をしたのですか？」

長老はにっこりと笑って、精霊のお導きですよ、と言った。

いや、答えになっていないと思いますが。

「今日はもう遅い。

旅の疲れもあるでしょうから、今日はもうお休みなさい。

部屋までリリィに案内させますからね。」

有無を言わさず話を切り上げられた。

もう何も話す気はないみたい。

リリィさんの後について部屋を出る。

やっぱり、この依頼は変だ。

でも、嫌な感じはしないんだよなー。

とりあえず

「どー思います？師匠。」

リリィさんに案内された来客用の寝室で作戦会議ｎｏｗ。
師匠は武器の大剣の手入れをしている。

「そうだな…。精霊の導きっていうのが気になるな。」

「あー、そうですね。
たぶん、神託とか予知みたいなものだと思うんですけど。
ここは”森の民”のエルフだから、精霊は植物。
もしかして、森で何かあったとか…？」

「そうかもな。
長老の話は嫌な感じがしたか？」

魔術師の感はよく当たる。
なんでかは分からないけど。
私の感もよく当たるから、師匠も頼りにしてくれている…と思う。

「嫌な感じはしませんでした。
むしろ好意的な感じが。」

「そうか…。」

黙々と武器の手入れをする。

そうなんだよね。
嫌な感じは全くしなかった。
むしろ好意的で、なにか期待しているような、そんな感じがした。

「とりあえず、お前はもう寝ろ。
明日は早いと言っていただろう。」

「はーい…。」

絶対師匠、面白い事が起こるといいなって思ってるよ。
まあ、自分の感を信じるか。

「おやすみです。師匠。」

「ああ。」

ゆっくりと瞼を閉じる。
この村は空気が透き通っていて気持ちがいい。
よく眠れそうだ。

朝日と共に

朝日の眩しさに目を覚ます。
あー、もう朝か。

「起きたか。」

「…おはよーございます。」

声の方を見れば、師匠は荷物の確認をしている所。
私、師匠が寝ているの見たことないんだよね。
私より後に寝るし、私より早く起きる。
むー、なんか悔しいんだよね。

身支度をしていると、コンコンッとノックの音がした。
リリィさんかな？

ドアを開けると、やっぱりリリィさん。

「朝食の準備が整いました。
依頼について話をしたいので、昨夜の部屋に案内いたします。」

「ああ、わかった。」

師匠も荷物を片づける。
今日も一日ガンバロー。

追伸　リリィさんの作った朝食、とても美味しかった。

原始の森

深緑の中を駆け抜ける。
コートが風でバサバサと音を立てる。
前を見れば木々の間を走り抜けていく師匠の背中が見える。

今、私達は原始の森にいる。
私と師匠、そしてガイアさん。
村に来た時に案内してくれた人。
そして原始の森の案内人だ。

っていうか、2人とも走るの速い！
師匠は大剣を背負っているし、ガイアさんは長槍を持ってるのに！
自分に風の補助魔法をいくつも重複にかけて体を軽くして、しかも素早さも上げているに。
ついて行くのに一苦労だよ。

「おい、フィー！」

「っ、なんですか師匠！」

走っている時に大声出すのってきついんですよ！

「お前、モンスターの気配感じるか？！」

「モンスターの？」

そういえば、森に入ってからモンスターに遭遇していない。
今も結構深い場所にいるのに、遭遇しない。

戦闘になるの覚悟してたんだけど、おかしいな。

「…広域探査〈千里の風〉発動。」

魔力を風にのせて広げる。
感覚が広がっていく。
背の高い樹木、揺れるのは木の葉、苔に覆われた大地、透明な川、
青い空。
それだけしかない。
生き物がまったくいない。

「…なんで、なにもいないの？」

どういうこと？
モンスターが全くいない。
恐ろしいまでに静まり返った森。
まるで、この森が全てを飲み込んでしまったかのような静けさ。

「師匠！おかしいです！モンスターが全くいません！
いや、言い方が変ですけど！モンスターどころか蟲の一匹もいません！」

「やっぱり、そうか！
とりあえず、休憩するぞ。」

そういうとガイアさんと師匠が立ち止まる。
つ、疲れた…！
湿気があるからか喉はあまり渇いていないけど、疲れた。

「おい、どういう事だ。

この森にはモンスターがいないもんなのかよ。
それともなにか異常を感じて逃げているのか？
長老もほとんど何も話さなかったし、朝に言われたのもお前を連れていけだけだぞ。
なにか知っているのか？」

ゼーゼーと私が息を切らしているのに、2人はケロッとしている。
ってゆーかガイアさん、どこに向かってるんですか。

「…あんたらは精霊に選ばれたんだよ。
そして長老に認められた。それだけだ。」

「どういうことだ。」

「”あれ”は来訪者を待っている。
俺達”森の民”ではない来訪者を。
俺に言えるのはそれだけだ。」

「”来訪者”ねぇ。」

「もう十分休んだだろう。
あともう少しだ。行くぞ。」

そう言うと、ガイアさんは走り出した。
え、もう行くんですか。

すると突然の浮遊感。

「え。」

「遅いから抱えていくぞ。」

「え、ちょっと待ってください。
遅いのは認めます。
だけど脇に抱えるのは止めてくれませんか。」

「さあ、行くぞー。」

「人の話を聞いてください！」

私をわきに抱えたまま走りだす。
せめてお姫様だっこ…は私が嫌だ。
それに、なにかあった時とかすぐに対処できないし。
肩に担がれるのもなー…。
胃がうえっってなりそう。
いや、今も胃がうえっってなってるけど。

そのまま師匠に抱えられながらガイアさんについていくことになりました。
いや、楽なんだけどさ。
楽なんだけど…わたしもう１６歳なんだよね。
ツルペタで幼く見えるけどね！
よく１２歳とかに間違われるけどね！
ボンキュッボンが羨ましいです。

原始の森（後書き）

主人公はツルペタ。身長も低くて童顔だから１６歳には見えない。髪が短いから少年に間違われる事もしばしば。

広域探査はそのまま周りの状況を探るための魔法です。

〈千里の風〉は千里眼＋風みたいな。

揺らぐ

進むにつれて空気が重くなるのを感じた。
そして、大地が揺らぐのも。
その揺らぎはだんだんと大きくなっていく。
私は抱えられたまま移動している。
うん、恥ずかしい。

どんどん空気が重くなって、大地が揺れる。
…ちがう、重いだけじゃない。
濃くて息がしにくい。
これは…魔力？
自分の魔力よりも遥かに強い魔力に息苦しさを感じる事があるって
先生が言ってた。
私の魔力は弱くはない。強くもないけど。
じゃあ、この魔力はどれだけ強いんだろう。

「大丈夫か。」

また浮遊感。
気が付けば片腕で抱っこされていた。
うん、体勢が変わっただけで恥ずかしいのには変わりないんだけど。
ちょっと気を使ってくれたのかな。

「…師匠は、息苦しくないんですか？」

「全然。」

「…そうですか。」

あー、完全に足手纏いだよな。
村に残ったほうがよかったのかな。
後ろ向きな事を言うと師匠に怒られるから言わないけど。

「当てられたか。」

あれ、ガイアさんの声…？
いつのまに。

「ガイア、さんは息苦しくないんですか…？」

「すこしだけな。
嬢ちゃんはどうも魔力に敏感みたいだな。
…引き返すか？」

やだなぁ、それは嫌。
悔しいな、足手纏いだけは絶対にいや。

「…だいじょぶ、です。」

「だけど、近づくと更に重くなるぞ。」

「だい、じょぶです。」

大丈夫。絶対に大丈夫。

私のせいで引き返すのは嫌だ。

「…ま、こいつが大丈夫って言ってんだ。大丈夫だろ。」

師匠？

「頑固だから言い出したら聞かねえしな。
さっさと行くぞ。」

「…はぁ。限界だと判断したら引き返すからな。」

「ありがと、ございます。」

ドシンッと大きく大地が揺れた。
ドシリ、ドシリ、と続けて揺れる。
巨大ななにかが、歩いてくる見たいに。

「うそ、だろ…っ。進路を変えただと！」

ガイアさんの表情が驚きで染まる。
なにが起きてるの…？

「…えっ？」

樹木が、左右に倒れていく。
倒れる？ちがう。
動いてるんだ。

木々が左右に分かれていく。
道が出来た。

それは深緑の

ズンッと空気が更に重くなった。

「…っ。」

見えない力で押し潰されてるみたいだ。
師匠が背中の大剣を掴んだのを気配で感じた。
私を抱えたままじゃ、使いにくいよ。

「…し、しょ。」

「黙ってろ。」

「でも…。」

私を抱える腕に力が入る。
揺れは更に大きくなっている。

重い体、指を動かすのも億劫だ。
頭だけをなんとか動かして、道の方を見る。
木がひとりでに動いてできた道。
その奥は暗くて見えない。
その向こうから、強い魔力をまとったものが来るのを感じた。

最初に見えたのは鈍く光る金色の光。

闇の中からそれは現れた。
鋭い牙と爪。
苔に覆われた体。
それが歩くだびに揺れが起き、周りには緑色の淡い光が舞っている。

「…巨大な、龍。」

だれが、そう言ったのだろう。
私か、師匠か。それとも両方か。

それは私達の方に確実に近づいてきている。
動けないほど大地が揺れる。
それは私達の前で止まった。

動けない。
強大な威圧感に、息が出来ないほど強い魔力に、動けない。

金色の目が私達を射抜く。
私はそれを見つめ返す事しかできなかった。

どれくらい、そうしていたのだろう。
龍は顔を背けると道を引き返して行った。
樹木が元の場所に戻っていく。
何事もなかったかのように。
空気が軽くなっていく。

あ、もう限界。

張り詰めていた緊張の糸が切れた。

ぷつんと意識が闇に沈んだ。

私と布団、師匠と手合わせ

暖かい。
モフモフとした暖かさ…毛布？
横になっているってことは今、私寝てるのか。
目を開ければ、見覚えのある木目調の天井。
戻ってきてたんだ。
ってことは師匠がここまで運んでくれたのかな？
後でお礼言わないと。
…にしても、あれはなんだったんだろう。
深い緑色の苔に覆われた…ドラゴン、だよね。
あんなに大きいドラゴンは見た事がなかった。
それに、あの威圧感。
あれは魔力特有のものだった。
普通、魔力を持たない人は魔力を感じない。
だけど魔力の無い師匠でさえも、威圧感を感じていたみたいだったし。
あの巨大なドラゴンが魔力を持っていた？
ドラゴンが魔力を持っているなんて聞いたことが無い。
本当に、あれはなんだったんだろう。

「やっと起きたのか。」

「…師匠。」

ぼんやりと考えていると、師匠が部屋に入ってきた。

「私、どれくらい寝てたんですか？」
「あー、だいたい3日ってとこか。」
そんなに、寝てたんだ。
「…すいません。」
「別に。俺もいろんな奴と手合わせ出来たからな。」
そうですか。
なんか顔がツヤツヤしてますね、師匠。
師匠は体力が余り余っているから大変だったんだろうな～。
師匠の手合わせに付き合ってくれた方々、本当にありがとうございました。

依頼達成？

広い部屋、長い机、魔石の杖を持った老婆、後ろに控える女性。
私達は客間にいる。
この部屋に来るのは、依頼の内容を確認した時以来だな。
あの時と違う所は、ガイアがいることだ。窓側の壁に寄り掛かっている。

「もう体調は大丈夫かい？」

「はい、大丈夫です。」

「そうか…。ガイアから、話は聞いておるよ。無事、出会えたようじゃの。」

長老は、あの巨大な龍の事を知ってたんだ。
やっぱり。

「依頼内容は『原因不明の揺れの調査』。
揺れの原因はあの巨大な龍…という事でいいのか？
だが、あなたは原因が分かっていたようだ。依頼をする必要があったのか？」

そうなんだよね。依頼をするにもお金がかかる。
原因が分かってたのなら、依頼をする必要が無いと思うんだよね。
もし、あの巨大な龍を討伐したり追い払ったりして欲しいって事なら別だけど。だったら、原因の調査じゃなくて討伐って以来する

よね。…あー、無理無理。あの龍相手に戦えないよ。負ける、絶対に負ける。討伐依頼じゃなくてよかった。

「ふむ…まあの。
お主たちを会わせる事が、目的じゃったからのう。」

「私達を会わせるのが目的…？」

「そうじゃ。
お主たちはあの龍をどのように感じた？」

「えっと…威圧感が、凄かったです。息が、出来なくなるぐらい。
あんなに大きい龍は初めて見ました。普通、ドラゴンは体が大きくなるにつれ凶暴さが増す事が多いですが、あの龍は…おとなしい…いや、私達を観察しているように感じました。知性が、あるように見えました。」

「俺は、攻撃も警戒もしない、変な龍だと思った。
フィーの言う威圧感は感じたが、息が出来なくなるって程ではなかったな。」

ゆったりと、地面を揺らして歩いてきて、巨大な体には苔が生えていて、私達を静かに見つめている目。周りを飛ぶ緑色の淡い光、龍が通る道を作るかのように動く木々。
鮮明に思い出せる。

「あの龍はなんなのですか？
あの威圧感は魔力に似た物を感じました。
だけど、魔力を持った龍なんて聞いた事も聞いた事もありません。
それに、あんなに大きな龍が『原始の森』にいる事を、聞いた事

がありません。」

『先生』から、聞いたことが無い。龍のことで先生が知らない事なんてない。

ありえないんだ。だって先生は、龍に魅せられた人だから。あの龍の事を知っていたら、嬉々として話すはずなんだ。

なのに、『原始の森』にあんなに大きな龍がいるなんて、聞いたことが無い。

「ふむ、これも何かの縁か。

お主たちがここに来たのも、精霊のお導き。

…よかろう、全てを話す事は出来ないが。」

ゆっくりと、扉が開き始める。

扉の向こうにあるものは、なんなのだろう。

後々になってよく、私はこの事を思い出すようになる。

ああ、あれが。

あれが、始まりだったのだと。

ただいま

壁にはツタが這い、窓はひび割れていて、庭は荒れている。
時折聞こえる不気味な笑い声。
ゆらゆらと揺れる不気味な人影。
周辺住民からは幽霊屋敷として恐れられている。

まあ、分からなくもない。
手入れをしていない庭は雑草が生え放題で、窓はひびが入ったまま。この様子だと家の中も掃除をしていないのだろう。それはこの家の主が全く周りの事に関心を向けない事が原因なのだが。

「相変わらずだな。」

師匠が呆れたと言わんばかりにいう。

「そうですねー。
でも、そこが先生のいいところだと思いますよ。
変わらないでいてくれるって、嬉しいし安心するじゃないですか。
」

旅をしていると沢山の物や人に出会う。
だけど、それは一時の出会いで、また会える事は少ない。
また会えたとしても、変わっている事が多いんだ。
それは、良い変化だったり悪い変化だったり。
少しずつ変わっている事もあれば、前の面影もないぐらいに変わっている事もある。

変わってしまうのは少し悲しい。だけど、仕方が無い事。変化しないものなんてどこにもないから。
だから、変わらないでいてくれると嬉しい。特に、この先生の家はとても安心する。

「…まあな。」

ほらね。
師匠だって、そう思ってる。

ドアを開けると、ギギギギッと軋んで埃がぱらぱらと落ちてくる。

「せんせー！ただいまー！」

返事無し。

「…寝てるのかな？」

「そうなんじゃねえのか。
ったく、掃除ぐらいしろよな。」

廊下には視覚できるぐらい埃が覆っている。しかも綺麗に満遍なく。
師匠が歩くと足跡ができる。
もしかして先生、外に出てない？

「おい、フィー。」

「なんですか師匠。」
「笑い声が聞こえねえか。」
耳を澄ましてみると、たしかに聞こえる。
「あー、本当だ。」
ふひっ、ふひひひひ。この特徴的な笑い声は
師匠の歩くスピードが速くなる。
表現するならばスタスタからズカズカとなった。
ある部屋の前で止まり、乱暴にドアを開け放つ。
ふひひひひひひひひ。
「おい、ディー！
女がそんな笑い方すんじゃねえ！」
その部屋は、ドラゴンで埋め尽くされていた。
あ、生きたドラゴンじゃないよ。
小型のドラゴンの剥製、壁には沢山の資料が貼り付けられている。
額縁に入れられた鱗や牙。
先生は剥製の前で不気味に笑っていた。
うん、怖い。というか不気味。
今はもう慣れたけど、最初は怖かった。
先生は私たちに気付いたのか、緩慢な動きで顔を私達の方に向けた。

「おんやあ？
帰ってくるなら便りぐらい出さんかね。驚いてしまったではないか。」
「全然驚いているようには見えねえよ。
それに、手紙は出した。てめえが読んでねえだけだろうが。」
「そうだったかな。
フィアは少し背が伸びたか？」
「先生！」
思いっきり先生に抱きつく。
「ただいま、先生。」
ただいま、私の帰る場所。
「おかえり。」

ただいま（後書き）

先生＝ディーです。やっと出せた！
ディーはドラゴン大好きな変人です。変な笑い方をする人で、爆笑の時は「うひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！」と笑います。

先生に旅の報告

先生特製の薬草茶は疲労回復・滋養強壮効果があるらしい。ズズッと啜れば、口に広がる苦味とほのかな甘み。このお茶を飲むと帰ってきた事を実感できる。あー、帰って来たんだなあ。

「それで、今回はどんな所に行って来たんだい？」

いつもの通りに先生が私たちに尋ねる。
先生は私達が帰ってくると、どんな旅だったか尋ねる。
そしたら私達は先生特製の薬草茶を片手に話をするのだ。

「えっと、ですね。ケグンの沼地にワームの討伐に行きました！あそこは凄いですね。歩きにくいし、背の高い草がいっぱいで周りが見えにくくて、気が付いたら後ろに！」

「あー、たしかワームが大量発生してたんだったか？」

「そうなんです。他にも冒険者が来てたらしいんですけど、霧が酷くて。結局は個人で倒してましたよね。」

「そうだな。」

「でも、ワームが次から次へと！白くてブヨブヨしていて、それが辺り一面にウジャウジャいるんですよ！？ほんっとうに気持ち悪かったです！…でも、結構報酬がよかったんですよね。」

「次は…たしか、護衛だったか？」

「魔獣族の商隊の護衛です！
かっわいかったんですよ！初めて魔獣族を近くで見たんですけど、私より小さかったんですよ！びっくりです。大きい荷物を背負って、ちょこちょこ動くんですよ。かわいかったです！」

「だけど、結構血の気が多かったよな。」

「あー、たしかに。
敵をぶっ飛ばしてましたよね。しかも素手で。護衛必要かこれって感じでしたよね。あんなに小さいのに、どこにそんな力があるのか…不思議です。」

「小さいって言っても、、フィーとそんなに変わらなかったけどな。
あんなか混じると、どこに行ったのか分からなくなったぞ。」

「どーせ、身長低いですよー…。」

「ふひひ、身長が高いのも考え物だぞ？」

「そーなんですけど。やっぱり、小さいっていうのも…。」

先生は背が高いからね。
でもでも！私の場合、低すぎると思うんですよ。

「で、その護衛依頼の後にターソル村に行ったんだよな。」

「あ！そうですよ、先生！そこで龍に会ったんです！」

「龍！」

先生の眼の色が変わった。

「『原因不明の揺れの調査』っていう依頼でターソル村に行ったんです！あ、ターソル村は東にあるエルフの『森の民』の村だったんですけどね、すぐ近くに『原始の森』があるんです。」

「『原始の森』！あそこに龍がいたのか？！」

「はい！
すっごく大きくて、息ができないぐらい威圧感が凄くて、私気絶しちゃったんですよ。だけど師匠は威圧感はそんなに感じなかったって！」

「ああ、そうだな。あの威圧感も、あの大きさに感じていただけで息苦しさはなかった。」

「そうなんです。だけど、私はその威圧感に魔力に近い物を感じたんです！」

「龍に魔力！そんなことがあるのか！ドラゴンはあのしなやかな肢体、強靭で色彩に富む鱗、血を踏みしめる爪、全てを貫き裂く牙！種によっては空を駆けるためにある翼はとても薄くとても軽い！だがけして破ける事が無く、あの美しい生き物をより一層美しくさせている！気高く誇り高く孤高であるクアーレ・ドラゴンはまさしく大型の中で一番美しい！銀色の鱗は光の当たり加減では純白にも見え、それはまるで純白の雪の如く！だがクアーレドラゴンの美しさは外だけではなく内もまた美しい！数年に一度ある繁殖期では番を見つけ通常2～3頭の幼獣を育てる。だが、幼獣と言うのはその非

力さゆえ様々なものに狙われるものだ！だが、クアーレドラゴンは幼獣と自分の番を命がけで守る！たとえ自分が犠牲になったとしてもだ！何と美しきことか！このクアーレドラゴンのクアーレとはハスミヤ地方の古き言葉で気高いという意味。それはクアーレドラゴンの外と内を表している！昔の人間もクアーレドラゴンの気高い美しさにやられたのであろう！ああ、今は亡き同志よ、君の英断に祝福あれ！君の功績は永遠に語り継がれる事であろう！だがあの海に生きるドラゴンもまた美しい！海に溶ける青い鱗、それは瑠璃色の宝石！その鱗は装飾品にも使われる事があるほど美しい。地を駆ける足はヒレに変化し、あの広く深い海を自由に泳ぎまわれるようになっている。そのヒレは薄く軽く丈夫で、一説によれば翼が変化したという説もある。だが、私はこの説に異議を訴えよう！」

あ、これ止めないと永遠に続く。

「で、先生。ドラゴンに魔力があるなんて聞いた事もないし、あんなに大きいドラゴンがいたら先生が知らないはずが無いと思って、その依頼主である長老さんに聞いてみたんですよ！」

「ああ、ドラゴンについて私に知らないとこはない！」

「ドラゴン以外に興味が無いだけだろうが。」

師匠、ドラゴンにしか興味無い所が先生なんですよ！

先生に旅の報告（後書き）

先生はドラゴンについて語り出すと止まらなくなります。
それを聞いてフィアはドラゴンについての知識を吸収したんです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8960t/

私と師匠の龍を巡る旅

2011年10月12日03時07分発行